2 オンラインを生かして伝統音楽を現代につなげる
——「箏をめぐる現代(いま)~オンラインで魅せる楽器」を通して

1 はじめに

オンラインを生かして伝統音楽の魅力を広く現代につなげる音楽マネジメントのあり方について，アートマネジメント人材育成の研修報告を通してとらえていきます。

資料とするのは「日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメント人材育成 ―伝統×現代のクロスオーバーによる新たな価値の創出をめざして―」(2020 年度）の企画 B2「箏をめぐる現代(いま) ～オンラインで魅せる楽器」における企画・制作の研修報告です。

(1) 問題意識

- オンラインによる映像や音源ならではの“音楽”の伝え方・伝わり方があるのではないか。
- オンラインで伝統楽器による新たな音楽文化をつくることを通して，伝統楽器への関心を高めることができるのではないか。

(2) 研修の目標

- 伝統と現代を結んだオンラインを活用したワークショップを企画し，動画を制作し配信する。
- 伝統と現代を結んだ音楽文化の創造への関心を高めるための，オンラインを活用したワークショップのアートマネジメントの方法を学ぶ。
- 伝統音楽・芸能分野の撮影・編集技術を学ぶ。

(3) 研修の組織・期間

- 講師：滝田美智子（東京音楽大学客員教授）
  Dual KOTO×KOTO　梶ヶ野亜生　山野安珠美
  姫田蘭（映像制作ディレクター・カメラマン）
- 受講生：公募による 10 名
- コーディネータ：伊志嶺絵里子　加藤富美子
- 期間：2020 年 9 月～2021 年 3 月

(4) 研修スケジュールと内容

研修は「実践セミナー」(全 4 回）と「企画・制作研修」(全 5 回)，それをふまえた撮影・編集というスケジュールでした。(以下に抜粋)

講義 1：「箏をめぐる現代」の実践例

- 滝田美智子「二十五絃箏が広げる現代の邦楽」
- Dual KOTO × KOTO「箏を通して“音楽”の力を広げる」

講義 2：オンラインによる音楽ワークショップ

- 伊志嶺絵里子「ビデオ配信型と双方向型」

ワークショップ：

- Dual KOTO × KOTO「箏曲の現代的なありかた」
- 姫田蘭「ワークショップ撮影のカメラワーク」

グループワーク 1：「箏をめぐる現代」のイメージについてのディスカッション

グループワーク 2：「企画テーマ」「企画内容」と「映像」の関わりについてのディスカッション

2 オンラインを生かし伝統と現代をつなぐアイディア

講師の講義やワークショップ，ならびにそれを受講した受講生からの課題提出やグループディスカッションでは，「オンラインを生かし伝統と現代をつなぐ」内容と方法について斬新なアイディアがさまざまに出されました。

(1) 講師からのアイディア

- 箏を通して伝えることができる“音楽”の力や表現の可能性をどこまで広げるのか。民家などホール以外の所での音の体験，誰も嫌いな人がいない箏の音，自然音と一体になれる箏の音などに目を向けたい。(Dual KOTO×KOTO)
- 「アートにエールを（2020)」(東京都）での二十五絃箏と韓国のコムンゴとチャンゴのセッションなど，映像を通して楽器をめぐる出会いが生まれている。その成果と問題点をふまえ，オンラインを通した音楽文化を生みだしたい。(滝田)

- 映像で音楽を表現することで，表現の新たな可能性を広げたい。（姫田）

(2) 受講生からのアイディア

箏曲の専門家から西洋音楽のアートマネジメントの実務家，音楽大学のピアノ専攻の学生まで，幅広い層の受講生からは，企画の方向性ならびに具体的な企画内容や手法について，さまざまな切り口からのアイディアが出されました。

全体の方向性を示すアイディアとしては，産学グローバル連携促進に携わっている受講生から，次の提案が出されその後の研修の核となりました。

①息づかいや表情が「ストレートに伝わる」コンテンツ：奏者が発する音（聴覚情報）とともに重要な，「息づかい」や「表情」（視覚情報）をとらえたい。

②箏は創造的だと「自ら気づく」コンテンツ：「聴き手が演奏の『創造性』に自ら気づく」という，能動的な自己変革を起こすよう，コンテンツの側から近づくこと（大衆性）が大切。

③生の演奏「よりリアル」なコンテンツ：演者と聴衆が時間と場所を共有するという生演奏の鑑賞の制約を越えた，ICT 等を活用した「よりリアル」なコンテンツによる企画。（真部保良）

これらの方向性のもと，企画・内容・手法として以下のような提案がなされました。

- 箏奏者と異分野クリエイターのコラボレーション（例：箏×ファッション，箏×書道）。
- 世界中にファンをもつジブリ音楽の活用。
- 伝統と現代との融合として，演奏にリアル（アコースティック）とバーチャル（ボーカロイド等）を融合。
- 「人工音との対比で生の音をより浮き立せる」ことで，箏の音が新鮮に感じられ，聴き手の意識を高めることができそう。
- 古典の曲を，カメラワークと録音技術を駆使することで，演奏会では味わうことのできない箏独特の魅力を再発見させたい。
- カメラが動きながら奏者を捉え，そこで鳴る音の「迫力」はすさまじく，「芸術＝美しいもの」という既成概念を超えた現代性を感じさせることができるだろう。
- 一つの曲を同じテンポで演奏したそれぞれの音源を使い，「スイッチングによって音のコラージュのように編集」する方法もよいのでは。
- 演奏における，演奏家同士のコミュニケーションの様子を身体の動きと音からとらえることで，箏曲のあるいは日本の伝統音楽の魅力を伝えることができる。

これらのアイディアを生かしながらグループ 1，グループ 2 に分かれて企画・制作し，演奏，録画・録音，照明，映像編集の専門家の力を得て，映像作品を完成し現在配信しています[1)]。

3 オンラインを生かし伝統と現代をつなぐためのアートマネジメント

研修を通して浮かび上がってきた，オンラインを生かし伝統と現代をつなぐためのアートマネジメントのポイントを以下にあげます。

- 伝統と現代をつなぐ企画の，それぞれのねらいに沿って，オンラインによる映像や音源ならではの“音楽”の伝え方・伝わり方のファクタから何を，どのように生かすかを検討する必要がある。
- オンラインを通して真の新しい音楽文化を創出するためには，生の演奏「よりリアル」な音とはどうあるべきかの追究が欠かせない。
- 受け手がオンライン上での映像・音楽のなかに伝統が現代に生かされている創造性を感じ取り，能動的な自己変革を起こすような内容が望まれる。
- そのためにも，つくる側と受け取る側の双方の視点が交叉するような協働でのアートマネジメントこそが，新しい音楽文化をつくっていくことにつながる。

グループ1 活動報告

Sakura Rhapsody /“KOTO” feat.HATSUNE MIKU ～Tradition × Modern 「融合」して変わるもの，変わらないもの～

企画概要

グループ 1 の企画では，箏を題材にして，伝統と現代，聴覚情報（音楽）と他の五感（視覚など）を刺激する情報（映像など）の「融合」をテーマにした映像作品を創作し発信しました。「融合」の一つの手法として対比をとらえ，伝統と現代，リアル（アコースティック）とバーチャルとの対比などを融合させることを試みました。

演目は，受講生 5 人の立案による構成台本に基づいて創作された，日本古謡の《さくらさくら》による新作《Sakura Rhapsody》（作曲：本間貴士）です。バーチャルとしてボーカロイドの初音ミクによる歌唱を組み合わせ，リアルの演奏者として，受講生のうち箏やピアノを専門とする 3 人と講師の滝田美智子氏，作曲者本間貴士氏を迎えました。動画内容（15 分 30 秒）は次の通りです[2)]。

Ⅰ. Spring 雪見草：すべてのはじまり，繊細に咲く桜
（箏・二十五絃箏・低二十五絃箏＋初音ミク）
Ⅱ. Summer 浜辺の桜：波を見るさくら，風で散って緑の葉をつける桜
（二十五絃箏・低二十五絃箏・ピアノ）
Ⅲ. Autumn 燃ゆる秋：紅葉する桜，燃える秋
（二十五絃箏二面・十七絃・中棹三味線）
Ⅳ. Late Autumn 秋風に：（フルートソロ）
Ⅴ. Winter 東風を待つ：神秘的・宇宙的な雰囲気
（二十五絃箏二面）
Ⅵ. Spring again 再びの春：一層華やかに咲く桜
（二十五絃箏二面・低二十五絃箏・ピアノ＋初音ミク）

音楽の「融合」

「融合」をめざした構成台本（代表島多璃音）では，箏，他楽器・他ジャンル，《さくらさくら》と日本の四季をいかにして融合するかが軸となりました。たとえば構成台本では，「Ⅱ. *Summer* 浜辺の桜」における「融合」を次のようにとらえています。

「《浜辺の歌》の波感のある伴奏型と，《さくらさくら》のモチーフを使った自由な即興的編曲。箏でその可能性を追求するためには箏，十七絃，二十五絃箏，低二十五絃箏のいずれがふさわしいか。西洋楽器はピアノか弦楽器が考えられるが，音楽の流れと箏の独立性を守るため箏に和声を添える程度とする。」

同じ楽器を用いながら奏法を生かした音楽の「融合」もありました。「Ⅴ. *Winter* 東風を待つ」では構成台本では「DTM 内の Mallet や Sound Effects の中の優しい音色を重ね，神秘的・宇宙的な雰囲気を出す。」と記され，実際の楽曲ではハーモニクスの手法による二十五絃箏二面による，まさに神秘的・宇宙的な表現になりました。

バーチャルとリアルの「融合」

日本古謡の《さくらさくら》の歌を初音ミクに歌わせることで伝統と現代の「対比」を生みだし，視聴者が「②箏は創造的だと「自ら気づく」コンテンツ」にしたいと考えました。

音楽と映像の「融合」―音を「観る」

音楽と映像の「融合」は，「オンラインによる映像や音源ならではの“音楽”の伝え方・伝わり方」として，大きな価値を生み出しました。構成台本の意図に沿った見事なカメラワーク・録音・映像編集により，楽器を操る体や手の動きと音が一体となった映像として，音を「観る」（受講生のことば）ことになりました。①息づかいや表情が「ストレートに伝わる」コンテンツ，③ 生の演奏「よりリアル」なコンテンツという企画のアイディアが結実した姿です。音楽の表現に向け楽器に対峙する演奏者の腕，手，指先，身体全体の動きと息づかいが，音と一体となった映像で迫ってくるとき，それは聴く者にとってオンラインならではの真の新しい音楽文化となったのです。

（加藤富美子）

グループ2 活動報告

「Koto no oto ～箏の魅力をすべての人に
Fascinating Koto world for all」

企画概要

グループ2の研修では，企画立案の過程で，ターゲット層を「箏の魅力を知らない世代（子どもをもつ親世代）とし，その目的を「ターゲット層に箏の魅力を感じてもらい，箏を子どもの習い事の一つとして考えてもらえるような動画制作」としました。動画内容（17分）は次の通りです。

1.《百花譜》：屋外（庭）で演奏
2.《月の光》：合成した月をバックに闇夜の中で演奏（屋内）
3.《五段砧》：奏者背中合わせでの演奏（屋内）
4. ソプラノ歌手と子ども達が1～3の演奏を鑑賞した感想（インタビュー）
5. 箏奏者が語る箏の魅力（インタビュー）
6. 箏教室に通う子ども達の反応（インタビュー）

オンラインならではの価値の創出

動画制作と公演制作の企画立案過程を比較すると，動画制作は音質的な制約がある一方，企画内における「場」や「時間」という枠に縛られないという特徴があります。これによって，企画の自由度が格段に高まるわけですが，その中から目的と合致したオンラインならではの「リアリティ」を探求することは容易ではありません。

ここでは，今回の研修で探り当てたオンラインならではの可能性や効果について紹介します。一つは，講師でもある山野氏から発案された3.の奏者2名による背中合わせでの演奏です。《五段砧》が作曲された江戸時代，箏曲は盲人の職能組織であった当道の専業とされていました。つまり，当時はお互いの手元が見えない中で，この《五段砧》も演奏されていたのです。今回，その一端を追体験するために，通常の舞台公演では（箏の音の指向性により）実現困難な背中合わせという演奏形態をとりました。奏者にとっても初体験となりましたが，まさにオンライン配信ならではの「リアリティ」の発見となりました。

もう一つ，編集段階においてもオンライン配信ならではの効果を体感する瞬間がありました。当初受講生から1.《百花譜》の演奏動画内にニコニコ動画のようなコメントを挿入する案が出ていたのですが，仮編集を確認した段階で，演奏内の文字情報は極力カットする方針に変更しました。箏の弦が細かく揺れ動く様まで捉えた至近距離からの映像には，視聴者の感覚を研ぎ澄まし，耳を箏一音に向かわせていくような効果がありました。これも通常の公演ではなかなか感受できない経験でしょう。そこに文字情報を入れることで，この「リアリティ」が損なわれるのではないか。受講生が感覚的に捉えた上での判断でした。

編集作業の過程では再生回数を上げる（バズる）ことだけに意識が向きすぎると，元来の目的を見失いがちになることも分かりました。YouTubeで配信する場合，世界中の多種多様な動画がまさに競合するように溢れ返っています。そういった他ジャンルの動画と接触する中で，編集方法や動画特有のスピード感，テロップの入れ方など，効果的に取り入れられる部分とそうではない部分の見極めが重要になってくるでしょう。

新型コロナウィルスが猛威を振るう中，これまでデジタル配信に消極的であった伝統音楽・芸能分野でも新たな活路を求めこれに取り組む動きが広がりました。配信の手法を駆使することで新たな鑑賞者層を取り込むだけでなく，例えば長期入院を強いられている方に向けて配信することが可能になる等，提供側の視野を広げる機会にも繋がっています。リアルな鑑賞体験の重要性はゆるがない一方で，動画制作やデジタル配信といった新しいアートマネジメントによって，これまでの固定概念を打ち破るような新たな価値を創出できる可能性もあると感じています。

（伊志嶺絵里子）

1), 2) 映像，予告編，制作日誌を以下のサイトに収録。
https://www.tokyo-ondai.ac.jp/art_management/2020_b2/index.html